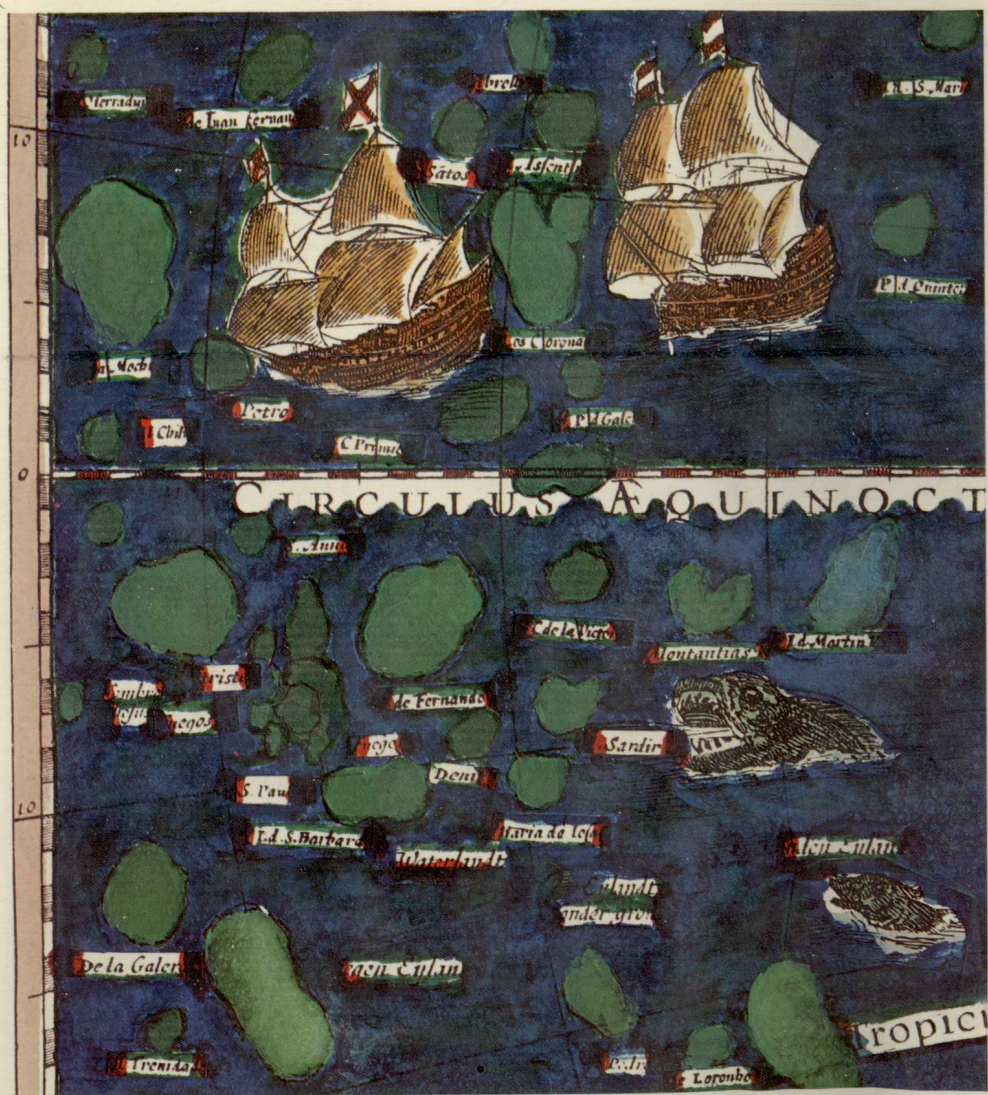


アルファベット群島

庄野英二

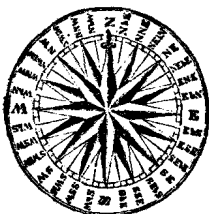




アルファベット群島

庄 野 英 二

H22575



偕成社の創作文学

ア ル フ ァ ベ ッ ト 群 島

NDC 913 偕成社 268p 21cm 1981年

1977年 3月 1刷

1981年 8月 7刷

著 者	しょう	の	えい	じ
	庄	野	英	二
発行者	今	村		廣

発行所 株式会社 偕 成 社

東京都新宿区市ヶ谷砂土原町 3 の 5

TEL (03) 260-3221 (代) 〒162

振替 東京5-1352番

本文印刷 新興印刷製本株式会社

多色印刷 小宮山印刷株式会社

製 本 文勇堂製本工業株式会社

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

ISBN4-03-720010-4

©庄野英二 1977

日本音楽著作権協会 (出) 許諾第8109465号

アルファベット群島／もくじ

はじめに・5

- A 欲ばり島 *Avarice Island*・13
B よい匂いの島 *Balm Island*・23
C キャンデー島 *Candy Island*・39
D ダイヤモンド島 *Diamond Island*・45
E 象島 *Elephant Island*・53
F フォスター島 *Foster Island*・59
G 大食い島 *Gluttony Island*・73
H はらぺこ島 *Hungry Island*・87
I アイスクリーム島 *Icecream Island*・95
J ジャンボリー島 *Jamboree Island*・105
K たこあげ島 *Kite Island*・121
L ライオン島 *Lion Island*・131
M モーツァルト島 *Mozart Island*・143
N ノスタルジア島 *Nostalgia Island*・151

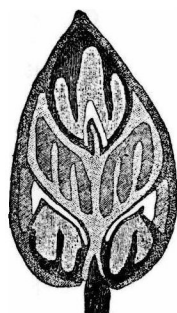


- O オリンピック島 *Olympic Island* • 161
- P ポニー島 *Pony Island* • 171
- Q せっかち島 *Quick Island* • 183
- R ^{にじ}虹の島 *Rainbow Island* • 187
- S ^{なま}怠け島 *Sloth Island* • 193
- T トーテムポール島 *Totempole Island* • 201
- U ウクレレ島 *Ukulele Island* • 217
- V 海賊島 *Viking Island* • 227
- W 風車島 *Windmill Island* • 243
- X クリスマス島 *X'mas Island* • 247
- Y ヨット島 *Yacht Island* • 251
- Z シマウマ島 *Zebra Island* • 257

あとがき • 262

作者と作品について - 前川康男 • 264





作ならびに扉カット・庄野 ^{しょうの} 英二 ^{えいじ}

1915年、山口県に生まれる。関西学院大学文学部哲学科卒業。現在、帝塚山学院大学教授。情感豊かな独得の童話・随筆作者として知られる。作品には『星の牧場』(野間児童文芸賞他)『ロッテルダムの灯』(エッセイストクラブ賞)『雲の中のにじ』『アレン中佐のサイン』『ボナベ島』『パタン島漂流記』等多数がある。

住所／大阪市住吉区帝塚山東1-11-5

は
じ
め
に

一九七二年夏、ぼくはかつてのサラワク王国の主都クチンを足場として、海ダヤク族の实地調査をしていた。

サラワクは、東マレーシアの西端部に位置している。クチンへは、航空路ができていたので、ぼくは空からはいったのであった。

航空路ができるまでは、南シナ海から、ジャングルの中のサラワク川を船でさかのぼらなければならなかった。イギリスの有名な小説家サマセット・モームもサラワク川をさかのぼったのであった。

現在も、サラワク川はさかんに使用されている。

サラワクは、ペッパー（こしょう）の特産地で、各地からクチンに集荷されたペッパーは、サラワク川をくだって世界各地に輸出されているのであった。

ぼくの調査しているのは、サラワク地方に昔から住んでいる海ダヤク族という民族である。ダヤク族は、陸ダヤク族と海ダヤク族とがあり、両種族とも以前には首狩りの風習があった。今日では、もう首を切るようなことはない。しかし、彼らの住居の軒には、人間のしゃれこうべがならべられていて、首狩り時代の風習をしのばせてくれる。しゃれこうべをたくさん持っ

ていることが権力をほこるしるしなのであった。

ぼくがある日、まだ見つけていないロングハウス（ダヤク族の長屋住居）を探しに、サラワク川の一つの支流（サラワク川には無数の支流がある）をモーターボートで走っていると、河畔に一隻の機帆船が停泊しているのを発見した。

ぼくは思わずボートのスピードをゆるめた。

その支流へはいったのははじめてのことであつたが、支流で原住民が手漕ぎのくりぬき舟や、竹で組んだ筏をあやつっていることはあつても、このような機帆船に出くわしたのははじめてのことであつた。機帆船は三十五トンか四十トンくらいの大きさであつた。

甲板の上で、何人かの水夫が仕事（たぶんペッパーの積みこみであろう）をしており、白いヘルメットをかぶり、白い半袖シャツと半ズボンの船長らしい男が水夫たちにさしずをしていた。その男は一見して白人らしい体格をしていた。

ぼくは、モーターボートをゆっくりと機帆船に近づけていった。ぼくは、こんなところに停泊している機帆船に興味を持ったからであつた。

モーターボートが近づくにつれて、ぼくは甲板上の白いヘルメットをかぶった船長らしい人が、なんだか見おぼえのある人に気がついた。「だれだったかな」しばらく考えているうちにやっと思ひだした。べつにぼくの知りあいの誰彼でもなかった。写真で見おぼえのあるアフリカの密林の聖者シュバイツァー博士にそっくりだったのである。

ぼくが手をふって敬意を表すると、その人は気づいて、やはり手をふってぼくを手招きしてくれた。ぼくはボートを横づけさせた。

白人なので、ぼくは英語であいさつをした。白いヘルメットの人は、やっぱり船長であった。水夫が、「キャプテン」と呼びかけていた。船長はぼくに、

「どうぞおありがとうございます。」

と、英語でいった。

ぼくはボートをタラップにもやって、船にあがった。

船長はひとりの水夫に、二脚の籐いすと小さなテーブルを甲板へはこばせた。

船長は話好きの人らしく、まるでぼくが訪ねてくるのを待ちかまえていたかのようにであった。船長の説明によると、この機帆船は、南シナ海から南太平洋にかけて、物産や土地の人々に必要な品物を輸送しているということであった。船は三十五トン。乗組員は七人で、いずれも東南アジアやミクロネシア、メラネシア、ポリネシア人から構成されている。乗組員はときどき、郷里の島についたとき下船して、またべつに交替に乗船してきたりすることがあるが、定員は七人であった。ふつう船には機関夫とか、炊事夫とかいろいろの分担があるのだが、本船では七人が七人とも水夫（甲板員）ということになっていた。そして、毎日、ひとりずつが交替でボースン（甲板長）になるのであった。

ぼくの訪ねていった日は、サンデーがボースンであった。

水夫は、それぞれ個有^{こゆう}の姓名があるのだが、本船では、本船用のつぎの名まえで呼ぶことに決められてあった。

サンデー

マンデー

チューズデー

ウエンズデー

サースデー

フライデー

サタデー

ボースンがサンデーの日はもちろん日曜日である。

船長の話を聞いていると、本船は一般の漁船や商船といふふう変わっていた。船を所有している会社があつて、決められた運送の仕事をやっているというわけではなく、船長が自分の思いのままに船を運^{うん}行^{こう}させているようであつた。

船長は、ひとりの水夫に命^{めい}じてラムのびんとグラスを二つはこんでこさせた。

ぼくは、船長にすすめられるままにラムを飲みながら話を聞いた。船長は、十年間も人間に

あったことがない人が、十年ぶりに人間にめぐりあったかのような親しみとなつかしさをこめて話をするのであった。それかといって声が大きくなることもなければ、いきせききって早口に話すのでもなかった。ポツリ、ポツリ、雨だれが落ちるようにゆっくりと話をした。ときには、何秒間か何分間か口をつぐんで物思いにふけることもあれば、ラムを口にふくんだまま、つぎの言葉^{ことば}をさぐりつつづけているようなこともあった。

船長の年齢はたずねる必要もなかったのでたずねなかったが、鼻の下のひげに白いものがまじっていたことから考えると、老人にちいかいのもかもしれない。しかし、からだの動きは海上生活で鍛^{きた}えてあるためか、身軽ですばしこく、若者とかわりがあるとは思われなかった。

船長の国籍^{こくせき}もたずねなかったものでわからなかった。白人ということだけはまちがひなかった。白人といっても、日にやけて赤ら顔をしていたので、〈赤ら顔人〉といったほうが正しいのかもしれない。

ぼくは、船長と話をしているあいだ、「ユウ^{あなた}」とはひとこともいわないで、「キャプテン」と呼んでいた。キャプテンの名まえを知る必要もなかったので、名まえをきくのもわすれてしまっていた。

船長は、話の中で何回も、ウォーレスラインという言葉^{ことば}を口にした。

「あの島はウォーレスラインの東側だった」とか、「あの島はウォーレスラインの西側だった」とか、「ウォーレスラインを右にこえ、左にこえ、ジグザグコースをとりながら南下^{なんか}している

ときのことであつた」などという使い方をしたのであつた。

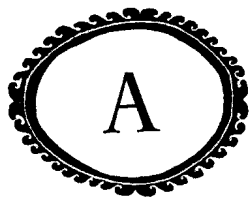
船長の船は、ウォーレスラインにそつて航行していることが多かった。もちろんウォーレスラインを遠くはなれてサラワクのようなところへくることがあれば、フィジー諸島などへいくこともあつた。

ウォーレスラインを、ごぞんじのない人のために、百科事典に書いてあることをかいつまんで説明しておくことにしよう。

ウォーレスラインとは、イギリスの動物学者A・R・ウォーレスの研究による動物分布^{ぶんぷ}上の^{じやう}一境界線^{きやうかいせん}である。A・R・ウォーレスは、マライ諸島の昆虫^{ちゆうぶ}、爬虫類^{はちゆうるい}、鳥^{ちう}、哺乳類^{ほにゅうるい}などを研究し、この地区の動物地理的分布について考察した結果、ボルネオとセレベスのあいだにあるマカッサル海峡^{かいきやう}と、ジャワの東にあるバリとロンボック両島のあいだにあるロンボック海峡とを連続する線によつて、マライ諸島を東西の二亜区^{あく}にわけたのであつた（一八六九年発表）。その境界から東方をオーストラリア・マライ亜区とし、西方をインド・マライ亜区とした。

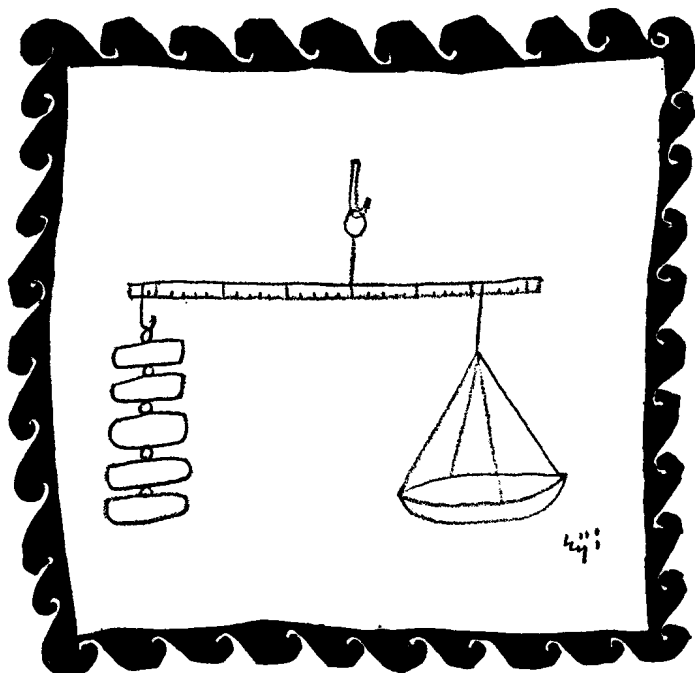
その後、イギリスのトーマス・H・ハクスリーはウォーレスの仮定^{かてい}した生物地理学上の境界線にウォーレスライン（Wallace Line）と命名^{めいめい}したのである。（平凡社、世界大百科事典による）

ぼくは、船長に聞きたいいろいろな島、ぼくがはっきりおぼえているのは二十六島であるが、その島のことについて記憶きおくしていることを正確に書きしるしておきたいと思う。



欲 ば り 島

Avarice Island



この島では、あらゆる物に所有者があつて私有財産の権利を主張しているのであった。島中あらゆるところに所有者の標示が目についた。

例をあげればきりが無いが、そのいくつかを紹介してみよう。なお、所有者の名まえはいずれも、頭文字だけで記入されていた。

- この道路この地点より北へ三百メートル 所有者 O・W
- この水流、この橋の下よりつぎの下流の橋の下まで所有者 W・A
- この広場にはえたる草 所有者 A・I
- この林の中のカナリヤ樹 所有者 K・N
- この砂浜の汀線より砂丘頂上に至る面積 所有者 S・U
- S・U 所有の砂浜の汀線より沖合一マイル（およそ一・六キロ）までの海面 所有者 S・E

そして、道路を歩いたり、橋を渡ったり、水流で足を洗ったりしたならば、そのつど所有者